

岡崎市制100周年記念事業  
岡崎まちものがたり：六ツ美南部 K-17

## 岡崎の人物史

この資料は「岡崎の人物史」からの抜粋である。

岡崎の人物史

発行日：昭和54年1月5日、著作者：岡崎の人物史編集委員会 代表：岩月 栄治  
編集発行：岡崎の人物史編集委員会、印刷所：研文印刷社

「岡崎の人物史」の89頁に「板倉勝重」、99頁に「野本新十郎」、「渡辺弥蔵」、  
150頁に「早川竜介」、190頁に「鶴田勝藏」、192頁に「太田功平」、249頁に「石川成章」がそ  
れぞれ記載されている。

家中に異例の諭示を發し、官軍を通過させて、城下町と藩士、領民の命を守ることに賢明さを論じたのである。

和多田・小柳津・石原等數十人は脱藩し、幕府の遊撃隊に身を投じていったが、岡崎の町は兵火を免れた。岡崎の無事を見届けた忠民は、藩主の座を忠直にゆずった。

南岡と号した忠民は、詩・画を能くし、学問の面にも情熱を注ぎ、藩校建設による人材育成の必要を嗣子忠直に説き、一八八三（明治一六）年、六十七歳の彼乱に満ちた生涯を閉じている。

忠直は、小沼藩主牧野遠江守康政の子として生まれ、嫡養子となり、禁裏御番を勤めている折、一八六九（明治二）年、岡崎藩主となった。四か月後には、版籍奉還をして知藩事になるなど、あわただしい動きの中で、職制を変更し、藩校允文館・允武館を建てて文武を奨励した。しかし、翌々年には知藩事を止めて上京することになる。藩士の多くは慕って上京したという。藩主を失った領民と、生活に迫られた藩士の見守るなかで、二年後、城はこわされた。その数年後、三十七歳で逝去した。

資料・本多忠勝伝・岡崎市史

## 板倉勝重

（一五四五—一六〇四）

最初の京都所司代

南北に長い中島町の西隣りに、田に囲まれた後醍醐といふ小字がある。その東隅の一角に木立があり、小さな祠がまつられている。ここが、勝重が若いころ出家していた永安寺（田長円寺）跡である。

勝重は、一五四五（天文一四）年、小美村（小美町）に生まれた。幼少より仏門に入り、香誓宗哲と称した。長男忠重が病気がちであったので、父の死後板倉家を継いだのは、三男定重であった。ところが、定重は高天神城の争奪戦で戦死してしまった。勝重は諸國を遍歴し、永安寺に帰って住職をしていたが、板倉家の断絶を心配した家康の命により、一五八一（天正九）年、還俗して家督を継ぐことになった。

学問に通じ、冷靜沈着であった勝重は、一五八六（天正一四）年、家康の駿府（静岡市）入りとともに、駿府

奉行に抜擢された。その時に勝重は、妻に次のようにさとしてゐる。

「奉行職は、徳川家にとっては極めて重大な職務である。この職にて国を滅ぼした例は極めて多い。お前が訴え事や争論に関して贈り物などを受けるとらば、国を滅ぼし家を滅ぼすものだ。お前が取附嚴禁を天地神明に誓うならば、この重職を引き受けるつもりだ」

職につくとただちに、「まず無欲なれ、財貨は身を破るものと」と説き、府内に名声を博した。一五九〇年、家



勝重の肖像（長岡寺）

康が江戸城に入るとともに、武蔵国（東京都、埼玉県および神奈川県の一部）から千石を受け、関東地方奉行、小田原奉行、さらに、最初の江戸町奉行を兼ねるまでになった。

一六〇〇（慶長五）年の関ヶ原の戦いによって幕府を握った家康は、京都を掌握し、大阪に備えるために、さっそく京都に所司代を置いた。翌年、勝重は加藤喜左衛門とともに所司代に任命された。

勝重の所司代時代は、多事多難であった。特に一六一四年、豊臣秀頼が再興した方広寺の鐘の銘「国家安康 君臣豊楽」をめぐる、にわかに関係が悪化した京都で、勝重の果たした役割は重要であった。勝重は間者を入城、密事をうかがわせて駿府や江戸に注進する一方、関所を設けて、京都にいる諸士が大坂に向かうことを禁じた。また、運送米を略奪し、兵糧米として大坂城内に貯えようとする企てを未然に防いだりもした。

勝重の京都所司代在任は、実に十九年にもわたった。これだけ長期間勤め得たということは、幕府からも朝廷からも信任を得ていたということであり、行政官として

の勝重の非凡な手腕を裏付けけるものである。その後、勝重の長男重宗も同職を引き継いで功績をあげ、勝重同様名所司代といわれている。

勝重の器量を物語る逸話はたいへん多い。三代將軍家光のところ、岡山の池田光政が国政の要点を勝重に問う正したところ、「国を治めるには四角の器に味噌を入れ、丸い杓子で取るようにされたまえ」と答えたという。大國の主が国を治める場合、大局的な見方が必要であるということを示唆したものだと思われる。

一六二四（寛永元）年、勝重は京都堀川の邸で八十歳の生涯を閉じた。法名を傑山源英長円寺という。遺骸は、三河の菩提寺長円寺に葬られた。一六三〇年、勝重の七回忌に際し、嗣子重宗は、寺を万燈山籠に移し、新たに堂塔伽藍を造り、山号を万燈山と称した。現在長円寺（西尾市貝吹町）裏の台地に、勝重の木像をまつる尚影堂（堂額は、かつて家康に仕えた文人である石川丈山の書である）があり、堂を囲んで板倉氏一族の墓が並んでいる。

資料・西尾市史・家康公遺訓と三河武士・寛政重修諸家譜・藩翰譜

## 大岡越前守忠相

（二六七七—一七五二）

西大平藩主となった名奉行

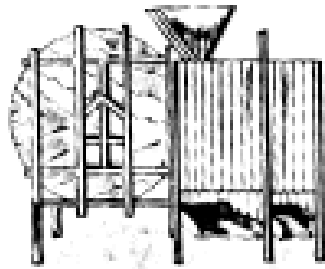
岡崎市大平町にある男川小学校の西隣りに、大岡越前守忠相の陣屋跡が残っている。大岡忠相は江戸町奉行として知られ、その名裁判は数々の大岡政談として後世に伝えられている。ところで、忠相はなぜこの大平の地に陣屋を置いたのであろうか。

もともと忠相の祖先は三河出身であるが、家康の移封とともに江戸に移り、忠相が生まれたのも江戸である。今からおおよそ三百年前の一六七七（延宝五）年、二千七百石の旗本大岡忠高の四男として生まれ、九歳の時には同族大岡忠真の養子となった。

二十四歳で家をついだ忠相は、御書院番・御徒士頭・御目付・山田奉行・普請奉行と、中級の旗本家が歴任する幕府の役方を順調に昇進した。

忠相が山田奉行であった時にこんな話が残されている。

## 産業の開発者



### 野本新十郎・渡辺弥蔵

(生没年不詳)

(生没年不詳)

#### 占部用水の開創者

野本新十郎と渡辺弥蔵は、岡崎市の南部、六ツ美地区を穿るおす占部用水を開いた功勞者である。

占部と呼ばれた一帯は、葦の茂るようなひどい荒地であったが、八六六（貞観八）年に三河権守となった占部日良磨呂によって開墾された。しかし、用水路がなく、しばらく晴天が続くと旱害に苦しむ状態であった。雨水だけが頼りで、占部の農民は、安心して作物を生産することができなかった。慶長の初め、正名の住人野本新十郎と中村の住人渡辺弥蔵は、良田を増やし、作物の生産を多くして、農民の窮状を打開するためには、この占部の地に用水を開く以外に方法がないと考えた。

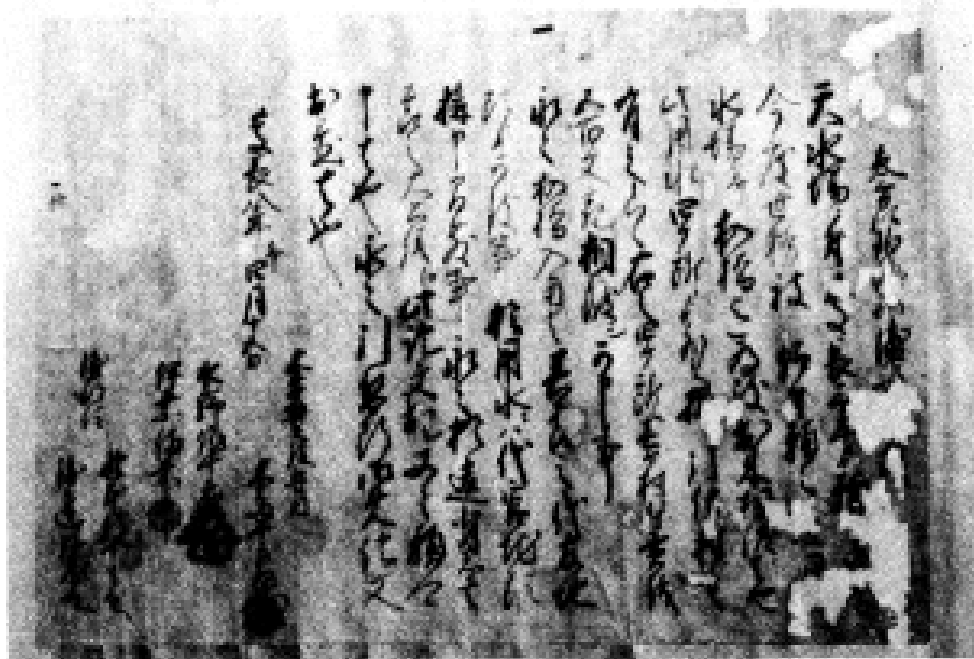
野本新十郎の道祖は、占部四郷（国正、定国、中村、正名）を開墾した占部日良磨呂であり、父は、松平氏に仕え、多くの功績を残したといわれる。一方、渡辺弥蔵

の遠祖は、桓武天皇の第二皇子であり、父は、尾州徳川公より、楯二百石を賜っていたといわれる。二人は、共に武門の出である。一五九八（慶長三）年、二人は、意を決して用水路の開削を領主に願い出た。

水源は、自然の地利を得なければ、他日用水が欠乏することを考えて、位置の選定に苦慮し、岡崎市の福島新田（天白町）に決めた。ここは、矢作川と乙川の合流点に当たり、水量の多い所である。そこから占部の地まで水路の延長は約八キロメートル、左右の堤防敷地を含めると、およそ六町二反六畝（六二六アール）余りになる。いよいよ開削の仕事に着手しようとする、農民から反対の声が続出した。そのおもなものは、次のようであった。

- 一 用水路を造ると、自分たちの土地が少なくなる。
- 二 用水路が決壊して、水害になるおそれがある。
- 三 多くの費用と手間がかかり、農民の負担が増大する。

反対する農民を説得しようと、二人は、寝食を忘れて奔走し、協力を求めたが、応ずるものは少数であった。しかし、用水路開削という意志は固く、工事を進めていっ



占部用水開発の御墨付 1603（慶長8）年（正名町郷代宅所蔵）

た。出資が増大すると、二人は、自分の田畑のほかにも、屋敷までも手離してその費用に当てるほどであった。

二人が手がけた用水路開削の事業は、五年間を費やして、一六〇三（慶長八）年にやっと完成した。その年、幕府は、二人の功績を認めて、占部用水に関する御墨付を渡した。しかし、二人の生活は完全に破壊され、妻子とも別れ、その後、子孫もなく家名も断絶という憂目にあった。

占部用水完成により、占部一帯は灌漑の利を得、豊かな稔りを取ることができるようになった。人々は、二人の霊を慰さめるための法会を毎年六月十六日に営むことにした。近年それが四月十六日になり、今では、目を定めていないが、毎年春先に正名町永応寺で水恩忌として続けられている。また、正名町にある占部川神社には、二人の遺徳をしのんで碑が建てられている。

資料 ・ 徳恩（城南道人編纂） ・ 六ッ美村誌 ・ 悠紀の六美（城南道人著） ・ 警見風土記（警見公民館）  
 ・ 岡崎の歴史（岡崎の歴史編集委員会編） ・ 岡崎の歴史物語（岡崎の歴史物語編集委員会編） ・ 六ッ美風土記（岡崎市立六ッ美中部小学校父母教師会編）

## 富田群蔵 （一七八九—一八七八）

農業用水池の開発者

富田群蔵は、一七八九（寛政元）年五月十三日、古田（豊橋）藩士西岡銀七の三男として生まれた。初め名を恒左衛門と呼び、後群蔵と改めた。一八一三（文化一〇）年、二十四歳で本宿村（本宿町）富田運八の養子となり、ついで旗本柴田家の本宿陣屋の代官として登用された。

遠祖勝家より始まる柴田家は、御書院番御徒頭、御小姓組頭、寄合肝煎を歴任した家柄で、額田、宝飯二郡の内十二の村を知行し、その陣屋を本宿村（現在の富田病院の地）に置いていた。この陣屋の初代代官として、一六九九（元禄一二）年に、鉢地村（鉢地町）の富田善太夫が任命された。役回りは、知行所勤定手伝勤仕であった。以後明治に至るまで、代々の富田氏がこの職を世襲し、知行所各村の行政を行ってきた。

富田群蔵はその中で優れた業績を残した人であった。

に多大な感銘を与えたという。そのころの光春について、  
同氏の弟の孫に当たる渡利道夫は、次のように語ってい  
る。

「時間を厳しく守る人で、会合などあるときには、  
必ず五分前には行っていた」「知事が訪ねてきても  
近所の百姓が訪ねてきても、同じように丁重にもて  
なし、帰りにには必ず玄関先まで送っていた」「千ど  
もが好きで、運動会など初めから終わりまで見てい  
た」「電車に乗ったときなど、年寄りに席をゆすら  
ない人がいると厳しく注意していた」「酒が好きで、  
縁先に酒たるをすえ、訪れる人にふるまっていた」  
「晩年になっても兵学書や新刊書には必ず目を通し  
ていた」「決して東の方へ足を向けて寝ず、明治天  
皇が岡崎をお通りになったときには、一人で岡崎駅  
へ行き、直立不動の姿勢で敬礼してお待ちしていた」  
一九二〇（大正九）年十一月十六日、病に倒れ七十二  
歳で逝去した。龍海院に葬られている。一九六四（昭和三  
十九）年には、岡崎市名譽市民に推挙されている。

資料：愛知県偉人伝（愛知県教育会編）

早川	手	千	永
川	島	賀	田
竜	鐵	康	安
介	司	治	太
（一八五三—一九三四）	（一八六七—一九二二）	（一八九一—一九五六）	（一八九五—一九五五）

岡崎が生んだ国会議員

早川竜介、竜介は一八五三（幕末六）年、早川藤大夫  
の長男として碧海郡六ツ美村大字中島（岡崎市中島町）  
で生まれた。

早川家は、旗本小笠原伊勢守の代官であった。九歳の  
時に父を失い、十四歳で代官見習となった。十六歳の時  
に明治維新となり、静岡の藩儒、宮原寺三郎の塾に入り  
静岡高等学校に通学した。

一八七二（明治五）年、額田県第二区三小区戸長、一  
八七四（明治七）年、村会議員、一八八〇（明治一三）  
年、県会議員に当選し、県会副議長として活躍した。一  
八八五（明治一八）年、農商業視察員として渡米した。  
帰国後、耕地整理の必要を痛感し、耕地整理法案の議会  
通過に努力した。成立後、全国に率先して六ツ美村大字





郷土の産業振興のために献身した手島徹司



政界や地方自治に活躍した早川電全

中島地内の耕地整理事業を実施した。

一八九〇（明治二十三）年、国会開設とともに立候補し、第一回の衆議院議員に当選した。以後、一九二四（大正一四）年まで、通算十回にわたり当選し、国政に参画した。地方においても大地主郡会議員として私財を投じ、地方開発にも貢献した。

一九一五（大正四）年、大正天皇即位の大典に際し、大嘗祭に献穀する悠紀彦田が、中島地区に決定された。竜介は、衆議院議員在職中であつたが、村民の希望により村長となり、八幡社境内に帝田事務所を寄付して率先指導監督にあたり、無事献穀供納の大任を果たした。多くの功績により一九三二（昭和七）年までに従五位勲四等瑞宝章、水難救済会一等有功章、帝国耕地協会賞などを受賞し、八十歳で逝去した。

**手島徹司** 手島徹司は、前半生を八帖味噌早川家のために尽し、後半生を地方政治、国政に捧げ、郷土の産業振興のために貢献した人である。

徹司の家は、維新の家禄奉還のため、武家屋敷を離れて戸崎村（現戸崎町）に移り農業を営んだ。十六歳より八帖味噌早川家につとめ、その精勤ぶりはものすごかつ

## 鶴田勝蔵

(一八四三—一九〇六)

農業の発展に尽力した功勞者

鶴田勝蔵は、一八四三(天保一四)年に、碧海郡中島村(中島町)で生まれた。性格が温厚で人情に厚かったため村人の信頼を受け、十八歳で庄屋となった。

以来、村の政治に四十有余年も従事した。その間、自費を投じて藍作りや養蚕業の発展をはかるなど、熱心に農業の発展に努力し、窮民救済のために日夜心血をそそいだ。

一八八九(明治二十二)年と一八九三(明治二十六)年、矢作川堤防の水防工事に關し、碧海・幡豆両郡が大紛糾をおこしたとき、勝蔵は東奔西走熱心に仲裁の勞をとり、平穩に解決させ工事を完了させた。

さらに、一九〇一(明治三十四)年、額田・碧海・幡豆三郡の九百三十五町歩の水田を「毛作田にするため、悪水排除の水路を新設した。また、農業生産の向上には

耕地整理事業がぜひ必要だと考え、五年間の歳月をかけ、中島村を中心に百四十七町歩余の事業を断行して、農業の改善に尽した。

以上が、勝蔵の業績の中でも特筆されるものである。常に地域の實態を把握し、農業発展のための公共事業に自分を犠牲にして尽した功績により、受賞は八十回にもおよんだ。特に、一九〇六(明治三十九)年三月には、多年の業績が認められ藍綬褒章を受けた。一九一〇(明治四十三)七月、六十八歳で没した。

資料・愛知県偉人伝(愛知県教育会編)・碧海郡誌



晩年の鶴田勝蔵

現岡崎市域における信治作の民謡を挙げると、矢作音頭・矢作小唄・六ツ美小唄・六ツ美青年歌・岩津小唄・本宿音頭・本宿小唄・紙圍音頭・三電社音頭などがあり、幸田小唄・津具音頭と県下各地のものまで手がけ、合わせて百六十曲にもなるという。自筆の民謡ノートが今もお岩槻家に残されている。

一九四八（昭和二十三年）、米麦の増産や農業経営の近代化に献げた生涯を五十八歳で閉じた。

資料・追憶岩槻君（顕彰会刊）・岩槻信治彰徳碑文



晩年の岩槻信治胸像

## 太田 功平

（一八九三—一九三〇）

六ツ美の菜種博士

菜種は、古くから農家の裏作物として全国各地で栽培されていたが、その栽培技術は劣り、薄利な作物として余り重要視されていなかった。しかし、大正時代の終りから昭和の始めにかけて、この菜種を農業経営の中心におき、菜種栽培の中心地として脚光を浴びた地区がある。それが六ツ美であり、「六ツ美の菜種か菜種の六ツ美か」といわれたほど全国にその名をとどろかせた。この発展のかけに菜種博士と呼ばれた太田功平の活躍があった。

太田功平は、一八九三（明治二十六）年九月二日、現在の土井町で生まれた。功平は、碧海郡中井村（現在の土井町付近）立中井尋常高等小学校を卒業すると、しばらく村役場書記・小学校準教員をしていたが、のち、愛知第二師範学校へ進学した。師範学校を卒業すると、櫻尾・依佐美・富士松・桜井等の尋常小学校の訓導として、



高松宮殿下の視察を受けた時の功平

十数年間教鞭をとった。

一九二七（昭和二）年、功平は、六ツ美村立農業補習学校・長谷川一男校長の招きで、教頭として勤務するようになった。この学校は、農業によって地域社会の発展をめざしており、彼は、農村を豊かにするには裏作物の充実を図ることが肝要であり、その一つに菜種栽培が適切であると考えていた。時代も化学工業発展期に入り、大会社が菜種油の生産にのりだし、それを専用の「なたね船」を使って大量に外国へ輸出するようになっていた。農家の人々も、これらの会社の需要に応えようと増産に

励むが、菜種の特性も知られておらず、肥料や病虫害予防に至っては、まったく研究されていなかった。

そこで、功平は同僚の橋原菊松（安城市城ヶ入町）・榎田柱（幸田町）らと共に、菜種の研究に取り組んだ。まず、内外の菜種栽培の文献を整理研究し、次に、種子選定、育苗、肥料、移植法など各項目について試験栽培をしていった。その栽培で好結果が得られたものについては、生徒や農家の人々に栽培してもらい、データを克明に集積していくという方法であった。また、功平は農家に出かけて細かな指導をしたり、菜種栽培についての研究発表をしたり、パンフレット等を配布したりした。

こうした功平の努力に触発されて六ツ美の菜種の収穫量が飛躍的に高まり、菜種が有利な換金作物として、農民の間に受け入れられていった。

一九二八（昭和三）年になると、大阪の古原製油会社が、六ツ美産産組合へ菜種の買い付けにやってきた。その時、会社側は農業補習学校の研究に注目し、その研究費を援助したいと申し出た。この資金によって、功平は、今までの研究を「雲臺調査」としてまとめ出版した。この書物の内容は、非常に優れたものであり、愛知県知事

より、農業の教科書として認可されたほどであった。また、このころ、六ツ美種（早生、中生、晩生などがある。）という新品種の開発に成功し、その結果、昭和四年には、反当収獲量を今までの三倍にあたる四石までに高めることができた。その後も、「実収四石、菜種栽培の合理的栽培法」の出版や全国各地に出張をし、菜種栽培法の講演を重ねるといふ活躍が続いた。

こうした功平の努力が、六ツ美の名を全国にとどろかせ、高松宮殿下、牧野内大臣などの農業（菜種）視察と なってあらわれた。特に、高松宮殿下視察の折には、殿下は、農業補習学校に立ち寄り、功平から菜種栽培の説明を受けると共に、功平に直接激励のことばをかけられたほどであった。

太田功平は、一九三〇（昭和五）年十二月四日、交通事故にあり、三十七歳の短い生涯を閉じた。しかし、菜種栽培の研究は絶えることもなく、野田愛吉（福桶町）・宮本孫一（本郷町・宮本一号の新品種開発者）らに引き継がれ、ますます発展していった。

## 津田信吾

（一八八一—一九四六）

日本で初めて合成繊維を生産した鐘紡社長

「石でも水でも空気でもよい。化学の力で糸を作れ。」一九三四（昭和九）年、鐘紡紡績株式会社社長津田信吾は附属の鐘紡研究所に向かって命令を発した。指令を受けた研究所は合成繊維部を設けて矢沢将英を中心にして石炭と石灰を原料とする日本初の合成繊維ピロン「カネビアン」を完成させた。それは日本の繊維業界が重化学工業へと発展する契機となった画期的な発明であった。米国ではナイロンが完成して日本の生糸を次第に圧迫し始め、また世界繊維市場の競争が益々激しさを増した時のことである。

津田信吾は一八八一（明治一四）年三月二十九日に能見町の旧岡崎藩士西山芳六の四男として生まれた。七歳の時同じ旧藩士の津田於菟の養子となって津田家を継いだ。於菟が福井県の官吏であったので、彼は岡崎を離れ

もたよらず、ただ身をもって真実一途、一念を女子教育の発展のために奉仕し、苦しい一生を歩みつづけた人であった。

このように白井こうは、女子教育機関の設置と、教育の機会均等の情熱に燃え、誠をもって、よき女性に、よき社会人にと、終始一貫した教育理念で、西三河地方の女子教育に大きな貢献をした。

一九三七（昭和十二）年、岡崎市長表彰（教育功労者）  
一九五二（昭和二十七）年、愛知県知事表彰、一九五三（昭和二十八）年、文部大臣表彰を受け、岡崎名誉市民の称号をおくられていることも、その業績によるものである。

一九五四（昭和二十九）年、老衰のため永眠した。八十五歳であった。

資料・西三の事業と人・岡崎女子高文集・白井こう先生伝

## 石川成章

（一八七二—一九四五）

地質学の権威者

成章は、一八七二（明治五）年六月二十一日に碧海郡六ツ美村大字中島字本町（岡崎市中島町字本町）の淨光寺で、石川鑑観を父として生まれ、地質学、宗教、漢詩文の方面で活躍した。とりわけ、地質学の面でその名を知られている。

一八九六（明治二十九）年七月、帝国大学に入って地質学を修め、一八九九（明治三十二）年七月に卒業した。この帝国大学で培った地質学の力を、多くの学校の講師をすること、後進に導き与えてきた。一八九九（明治三十二）年九月の東京真宗中学校講師を出発点として、東京高等師範学校、陸軍中央幼年学校、早稲田大学、京都帝国大学、大阪高等工業学校と講師を続けてきた。また、講師を続けるかたわら、旧制中学校の地質学の教科書を中心として、多くの著書を残している。その主な著

書を次にあげる。（『六ツ美村誌』より）

鉱物界 鉱物界教授指針 中学鉱物界 地文学教科  
書 地球発達史 地文学講義 地学教程 地文学要  
解 宇宙の黙示 自然の妙趣 自然科学と仏教

成章の明治・大正年間、職務の関係上、東京・京都での生活が中心であった。しかし、晩年は、郷里浄光寺に帰り、一九四五（昭和二〇）年九月六日に他界した。号を簡堂という。

資料・六ツ美村誌・浄光寺第一八代住職手記



還暦を迎えた石川成章

## 内藤 卯三郎

（一八九一—一九七七）

教育界発展の功労者

内藤卯三郎は、一八九一（明治二十四）年十月四日、神奈川県足柄上郡で生まれた。小学校時代から勉学に励み、鎌倉師範学校を開校以来の優秀な成績で卒業し、周囲の人々を驚かせたという。

一九一八（大正七）年、東京高等師範学校を卒業後、母校の教師となり、物理学を専門に後進の指導に当たった。一九二七（昭和二）年から三年間、物理学の研究のため英国に留学、帰国後、文部省督学官となり、わが国の理科教育の推進に努めた。

戦後は、奈良女子大学学長に就任、続いて一九四九（昭和二十四）年には、愛知学芸大学の初代学長となり、草創期の同大学の整備・充実や県下の教育・文化の振興に尽した。一九五一（昭和二十六）年、岡崎ロータリークラブが承認登録されるや、その会員となり、ロータリア